

戦後 75 年 宗門の若手僧侶が知るべき戦争責任問題（上）

ヒトラーを「唯我一人能為救護」と讃えていた宗門の罪は消えない

●仏教界で進む“戦争責任問題を後世に伝えていく”取り組み

今年には戦後 75 年となる。新型コロナウイルスの感染拡大の中であるが、大きな節目として、全国各地で展示などが企画されている。テーマで目立つのは「語り継ぐ」「未来へつなぐ」というキーワードだ。大石寺のある静岡県では、7 月 3 日から「少女少女と戦争」というテーマで企画展を開催し、若い世代に、10 代の少女少女が戦争に巻き込まれた実態を伝えようとしている。

仏教界でも、戦争責任問題をどのように後世に伝えていくか、考察が進んでいる。例えば、『中外日報』では 7 月 8 日から「語り、受け継ぐ 平和の思い～戦後 75 年」という連載を始めた。様々な宗派の僧侶たちが「終戦は反省誓う日」「8 月 15 日に鳴らす鐘に込めるのは、教団が戦争に加担した過去の反省」等とその思いを語っている。

●歴史から消し去ることができない戦争負担の罪

それに対して日蓮正宗はどうか。終戦 50 年に多くの仏教教団が「戦争責任」を認め謝罪を表明しているが、日蓮正宗は未だに「戦争責任」を認めることも謝罪することもない。

宗門の若手僧侶のために、宗門が戦時中に行った行為を列挙する。

- ① 法主が「未曾有の大戦に必勝を期せむ」等の「訓諭」を発して、信徒を扇動した。
- ② 法主や僧侶が侵略戦争を「出世の本懐」と言い、戦争に勝つことが大聖人の念願であると言って、大聖人の言葉を利用して、戦争に荷担した。
- ③ 教義を国家神道に合わせるため、法主をはじめ長老たちが「神札の受容」「御遺文の削除」「御書の発禁」「観念文の改変」「本地垂迹説の使用禁止」を決定した。
- ④ 本山の木々、「御堂及山門の銅瓦」、寺院の金属製仏具を武器の資材として提供した。
- ⑤ 信徒に献金を募り、軍用機などを軍に献納した。

以上のことは宗門の機関誌『大日蓮』や資料に記載されており、歴史から消えることはない。

●ヒトラーを「『唯我一人能為救護』の御文を思ひ出す」と讃嘆していた宗門機関誌

『大日蓮』の昭和 15 年 8 月号に、宗門僧侶の福重照平氏が「巨栗山樵」の名前で文章を載せ、「ヒトラー総統は正に世紀の英雄となった」「吾人茲に到りて法華經の『唯我一人能為救護』の御文を思ひ出す」とヒトラーをまるで仏を敬うように賛嘆している。

本年 5 月 8 日は、ドイツが第 2 次大戦で無条件降伏して 75 年であった。ドイツのシュタインマイヤー大統領はこの日、ベルリン市内で講演し、多くの犠牲者と苦しみをもたらしたドイツの歴史に触れて、「過去を思い起こすことを怠れば未来を失うことになる」「責任を認めることは恥ではない。否定こそが恥だ」と述べた。

若手僧侶は、“宗門が過去の罪を認めないままでいれば、社会から信用を失い、自分たちの未来を失うことになる”ということ、肝に銘じるべきである。（続く）